しんぶん 赤旗　2011年6月15日（水曜日）　（第3種郵便物認可）

3・11から 日本を問う

電気選ぶ権利 国民に

映画監督 鎌仲 ひとみさん

日本政府がぐずぐずしている間に、世界の国々は脱原発へ舵を切り始めたのではないでしょうか。

私が以前取材したスウェーデンでは、持続可能な社会に向け、地域のエネルギー資源を活用する取り組みが進んでいます。電力市場を解放していて、市民はエコマークのついた自然エネルギーの電気を選ぶことができるのです。

それは、今の日本のように送電線が独占されていては無理ですよね。けれど私たちには消費者として電気を選ぶ権利があるはずです。原発の電気を使えば、使用済み核燃料という放射性物質がどんどんたまっていく。自分たちの暮らしの延長線上に、核や放射能汚染があることを、国民全員が意識し、どうしたら安心して暮らせるのか考えないといけないと思います。

地域分散型の社会が大事に

昨年完成させた記録映画「ミツバチの羽音と地球の回転」では、山口県の上関原発に反対する祝島の暮らしと、スウェーデンのエネルギー政策を追いました。

原発計画を進める中国電力は、祝島の人たちに向かって「第1次産業だけではこの先やっていけない。原発があれば雇用を増やせます」などと言うんですよ。けれど島民は、自分たちの足元にある資源を守り生かしながら、反対運動を30年近く続け、いまだ原発は建っていません。

食料は海外から買ってくればいい。そうやって地域に根差し農業や漁業で食べていくことを、何十年にもわたって否定し続けてきたのは自民党や経済界です。それぞれの地域にある資源や財産を軽視してきました。そして、そういう価値観を受け入れなければ生きていけないと、思いこませてきた。

でもそれは違います。地域が自分たちのことを自分たちで決められる権利を大事にしていく地域分散型の社会を作っていくことが、これから大事になってきます。国策だから、地方はそれに従え。そんなやり方は、もう時代遅れです。

自分たちの暮らしを守るために原発に反対して、たくさんの人に迷惑をかけて恥ずかしくないのか。そんな批判を、祝島にぶつける人もいました。確かに祝島の人たちは、自分たちの愛する故郷と暮らしを守るために原発に反対しているわけだけれど、その一人ひとりの暮らしというものは、本当に大切にされなければいけないもののはずです。

それに俯瞰して見れば、彼らの運動は地球の環境を守っていて、私たち皆にとって必要なことでもあるのです。そうしたミクロとマクロの二つの視点で物事を考えていくことも大事ではないでしょうか。

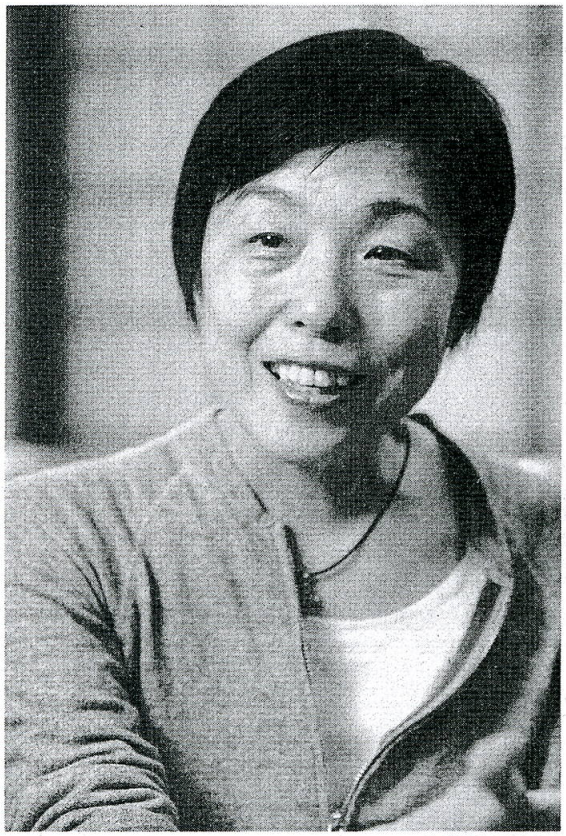
原発から脱却 私らの意志で

私が原発問題の記録映画を作るようになったのは、米軍の劣化ウラン弾で被ばくし、白血病やがんで死んでいくイラクの子どもたちに出会ってからです。被ばくで子どもたちを死なせないためには、これ以上放射能汚染を広げないこと。原発をやめることだと考えるようになりました。

けれど、福島第1原発で事故が起きてしまった。何のために映画を作ってきたのだろうと思いました。ある部分はもう手遅れです。だけどこれから良くしていける部分もある。私たちの意志で原発依存から脱していくしかありません。電気の作り方は、ほかにもいっぱいあるんですから。20年先30年先にどんな電気を使っていたいですか？と聞いたなら、日本の大多数の人は、持続可能な自然エネルギーを選択するだろうと私は思います。

今なお政府や東京電力は、原発は安全に運用すれば大丈夫だというメッセージを出し続けていますが、そうした情報をうのみにせず、自分で考えることが大切です。でなければ、私たちの安全な暮らしは守れませんから。

（聞き手・田中佐知子）



佐藤光信撮影

かまなか・ひとみ　「ヒバクシャー世界の終わりに」「六ヶ所村ラプソディー」。最新作「ミツバチの羽音と地球の回転」は東京・渋谷・ユーロスペースほかで上映中。その他の上映情報は☎03（3341）2863グループ現代。

文化 学問